
まさかの事件簿

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさかの事件簿

【Nコード】

N1198Y

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

成り行きで刑事になった佐藤は、難事件よりお茶汲みが好きなヘタレ男。そんな青年佐藤、まさかの事件ファイル。

1..ネギと美少女（前書き）

全年齢の範囲内だと思われませんが、物語の一部に流血・恋愛などの描写を含む可能性があります。閲覧の際は自己責任でお願い致します。また、当作品はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ございません。

1..ネギと美少女

「おう、いらっしやい」

立てつけの悪い扉が唸る音に、店主は麺の湯切りをしながら声を上げた。

夕食時をとうにすぎたこの時間に訪れる客は、大抵馴染みの者しかいない。店主が客に意識を向けるよりも目の前の注文品を優先させたのはそういう理由からだったが、いざそちらに視線を伸ばせば、その考えは半分当たりで半分外れだった。

「大将、久しぶり。新しい客を連れてきましたよ」

そう声をかけてきたのは、言葉通りここしばらくご無沙汰ではあったが、見慣れた常連客である。だが、連れは見覚えのない若い男だ。客はその二人連れだった。

彼らはカウンターに陣取ると、若い男の方がきよろきよと周囲を見回す。

「メニューはねえよ。定食かラーメンかだ」

「あ、じゃあラーメンで……いや、やっぱりちよつと待って下さい。……定食で」

「おう。兄ちゃんはラーメンでいいよな」

馴染み客が頷く頃には店主は厨房へと戻っていた。

「いやー、久々に大将のラーメンが食べますよ」

「なんだ、忙しかったのか」

「ええ、でかいヤマがありましてね」

深刻そうに顔を抱える男を見て、若い男が「え」と声を漏らし、店主は鼻で笑った。

「そんな話は聞かないがな」

麺を熱湯に放り、冷凍庫から取り出したフライをフライヤーに投げると、店主はリモコンを手にとりテレビのチャンネルをバラエティーからニュースへと合わせる。丁度耳慣れたテーマ曲が流れ、ト

ツプニュースはスポーツの話題だった。

「ニュースで取り上げられてなければ平和ってわけじゃないっすよ」
「そりゃそうだろうが、まあ、胡散臭い根拠はそっちの兄ちゃんの馬鹿正直な顔だな」

言われて男は連れを振りかえり、頭を小突く。

「顔に出るようじゃこの仕事、勤まらないぞ？」

「は、はい、すみません」

その小言が本気か冗談か声の調子では判別がつきかねたが、どちらにしても若い男の答える言葉はそれ以外にはなかっただろう。その周囲に確信させるほど人が良さそうな彼は、馴染み客と同じ仕事だとすれば確かに向いていないように見える。

井にスープを注ぎながら店主が苦笑していると、ああ、と馴染みの方がまた声を上げた。

「まだ紹介していませんでしたね」

「なんだ、結婚相手でもあるまいし、そんな改まって紹介していらねえよ」

「まあそう言わずに。まさかの人物なんっすよ」

そう声を上げたところで、また出口の方から派手な音が聞こえる。

「ただいまー！ 買ってきたよ、ネギ」

「もっと静かに開けろ！ 壊れちまうだろうが」

そんな会話の応酬に、二人連れの客も揃って出口の方を振りかえる。戸口にいたのは常連の男も見覚えのない、高校生くらいの若い娘だった。

ジャージに真っ黒なエプロンという酷く色気のないスタイルではあるが、顔は上々だ。ひとつに結わえた髪が、肩に着くか否かのところで歩く度ひよこひよこ揺れる。そうやって彼女は真っ直ぐにカウンターへ歩み寄ると、ネギが覗いたエコバックを店主の方へ突きつけた。

「ギリギリだ。暇がねえから今すぐ刻め」

「え、ネギないのにラーメン受けたの？」

「久しぶりの客が来たもんでうっかりしていた」

「ええー、ありえない」

ぶーぶー言いながらも、すぐさま女は厨房へ駆け込むと、ネギを洗い始める。

「大将、バイト雇ったの？」

「俺の娘だ。小遣いが欲しいというから先月から手伝わせている」
「ええ！？」

店主の言葉の後半は、男の素っ頓狂な叫びに掻き消された。

「大将、結婚してたのか……」

「常連なのに、知らなかったんですか？」

「だって今まで見たことねえもん」

連れに突っ込まれ、馴染み客は彼をじろりと睨んで一蹴すると、水差しから水を注いで一気に干した。

「そりゃそうだ。お前らみてえな手の早え連中の前に愛娘を出してたまるかと、今までは店に来るなってきたく言っていたんだ」

「じゃあ、もう手を出していいってことですか？」

「警視クラスになってから言え、馬鹿野郎」

定年まで働いても無理っすよ、と男はふざけて笑ったが、冗談のようなことを言いながら店主はまったく笑っておらず、若い男は目を逸らして水を一口飲んだ。それを見て、娘がくすつと笑う。

「初めまして、娘の莉子りこです。えっと、お客さん達は常連さん？早く顔覚えますね！」

刻み終わったネギを乗せ、カウンター越しにラーメンを出しながら、娘がにこつと笑う。それを見て、若い男が慌てたように顔の前で手を振った。

「いえ、僕はこの春から異動でこっちに来た……」

「そうだ、話が途中になったな。さて、まさかの人物とやらの紹介を聞くとするか」

店主が出した定食の盆を受け取りながら、恥ずかしそうに若い男は名乗りを上げた。

2..コーヒ―と刑事

佐藤真夏^{まな}。冗談のような名前は、苗字が平凡だったからせめて名前は、と思つてつけたのかと深読みした日もあるが、親に聞いてみたらやはり、単に真夏に生まれたからというだけだった。名乗った後には必ず「そんなまさか!」というリアクションがつきまとい続けて二十四年。昨夜も例に漏れず、ラーメン屋の親娘に揃って同じ反応をされた。

就職してからは、さらに突っ込みが増えた。

職業を聞かれて警察官と答えようものなら、もう一度「そんなまさか!」である。その為真夏は職業を聞かれたら大抵公務員と答える。そう言っておけば、勝手に役所の人間だと思われる。そんな真夏は、この春から異動で刑事になり、まさかと言われる要素がまたひとつ増えた。出勤する署が少し遠くなったのもあって、今までより三十分早く地下鉄に乗り込む。

まだ通勤ラッシュの時刻には早く、ゆうゆうと座席に陣取っていると、うとうとしている間に下車する駅名がアナウンスされる。慌てて飛び降りひと息ついて時計を見る。六時四十五分。駅から署までは徒歩五分もないから、コンビニで朝食代わりのゼリーを買って飲み干し、真夏が署の扉をくぐったのは七時丁度だった。

当直の署員に挨拶をして、上着を自分のデスクに掛けておもむろに掃除を始める。

刑事といえは聞こえはいいが、真夏はまだ勤続二年の下っ端だった。所謂キャリア組というものでもない。たまたま異動先で刑事が不足していた為に、希望も出していないのに成り行きで刑事になった。高い志を持って刑事を目指している警察官が聞いたらさぞ嘆くことだろうと、真夏はよく申し訳ない気持ちになる。警察学校時代の同期にも、そんな仲間は多くいた。

掃除を終えると、再びデスクに戻って上着を羽織りなおす。既に、

先輩達は出勤している。そろそろ上司が来てもおかしくない時間だ。外に目を向けると、丁度上司の姿が見えて、真夏は背筋を正した。

「おはようございます！」

挨拶のあとは、いそいそとコーヒーを淹れに向かう。

会社員の父にはこの仕事を度々羨ましがられるが、やっていることは会社員の下っ端となら変わりないとは中々言い出せないでいる。とはいえ、安定した収入に引かれてこの仕事をしているに過ぎない真夏は、難事件を追いかけるよりは掃除とお茶汲みをしている方が気が楽だ。

淹れたてのコーヒーを持って、上司である矢代警部補の席に向かうと、矢代は書類に目を通しながらぼそりと呟いた。

「また痴漢か……」

「ええ、またですか？ 最近多いっすね」

応えたのは先輩の日野である。昨夜ラーメン屋（定食屋？）に連れて行ってくれた五つばかり年上の男で、階級は巡査長だ。

「そうだな。佐藤、お前これやっつけ」

「あ、は、はい」

そんな言葉と共に唐突に書類を突きつけられて、真夏はコーヒーと交換する形で書類を受け取った。

「日野、佐藤の面倒見てやれよ」

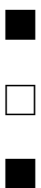
「了解です」

日野の方に会釈をしながら、真夏はデスクに戻ると早速書類に目を通した。矢代が言ったとおり痴漢の案件で、場所は自分が乗ってきた地下鉄の沿線、自分が下りたふたつ手前の駅になる。

「近いな。とりあえず行って、防犯カメラでも確認してみっか」

「はい」

後ろから覗きこんできた日野に声を掛けられ、真夏は席を立った。



「真夏、朝飯食ってからいかな？」

朝真夏が朝食のゼリーを買ったコンビニの前で車を止めて、日野がそんな声を上げる。

「え、いや……自分は食べてきましたが」

「そうなんだ、俺寝坊しちまったからまだなんだよな。何食ったの？」

「十秒チャージを」

「はあ？ そんなんでよく持つな。お前もなんか食えよ。日本人なら朝は米だ」

そろそろ九時に差しかかる。朝食にはやや遅く感じたが、そんな些細なことで逆らって先輩の機嫌を害してもなんのメリットもないと言われるままコンビニでおにぎりとお茶を買って、再び車に乗り込んだ。

それから買ったものを胃に納めながら件の駅に向かい、真夏と日野は手続きを済ませて防犯カメラをチェックした。

「この子が被害に遭った子ですね」

「あーあー。こんな短いスカート履いてたら、そりゃうっかり魔が差しちまうよなあ」

「ひ、日野先輩。そんなこと言って、誰かに聞かれたらどうするんですか」

丁度そんなときにボタンと扉が開いたもので、真夏は驚いて椅子から転げ落ちそうになってしまった。不謹慎なことを言ったのは日野の方であるのに、彼の方はけろりとした顔で駆けこんできた駅員を見ている。どうして自分が慌てなければいけないのかと気を取り直すが、駅員の慌てた様子を見て、またおろおろしてしまう真夏であった。

「どうかしましたか？」

多少お調子者の気があるとはいえ、そこはやはり経験で勝る日野が、落ちついた声で駅員に問いかける。その様子を見て、駅員からも慌てた様子はすぐに消えた。

「刑事さん、隣の駅で痴漢が捕まりました。すぐに向かってくれませんか」

思わぬ言葉に、真夏と日野は顔を見合わせた。

3..ビールと同僚

ホームの階段を二段飛ばしに駆け上り、真夏は切れた息を整えながら車に飛び乗った。だがエンジンをかけてもなかなか日野が現れない。

呼吸が正常に戻った頃によく現れた日野は、だが助手席のドアの前で煙草に火をつけた。

「な、何してるんですか先輩。急がないと」

「んな急がなくても、もう署の奴が向かってるって」

窓を開けて急かす真夏に、日野は煙と一緒に間延びした声を吐きだした。その様子に呆れながらも、そう言われてしまえば真夏も納得して大きく息をつく。痴漢の現行犯逮捕を報せる無線を聞くとともにしに聞きながら、真夏はぼうっと短くなっていく日野の煙草を眺めていた。と、急に日野は煙草を地面に押し付けると、胸ポケットを探りだす。

「はい、日野です。……今現場で防犯カメラを見ていたところです
が……はい。はい。了解しました」

取りだした携帯に向かって二言三言喋ると、日野は携帯灰皿に煙草を放りこみ、舌打ちしながら助手席に乗り込んできた。

「どうしたんですか？」

「係長が、例の現行犯逮捕のやつに向かってマルヒを連れてこいだと。いけしやあしやあと『お前ら今どこにいる？』だぜ。あの昼行灯、やる気ねえな」

「先輩、そのうちほんとに怒られますよ」

嘆息しながら、真夏は赤色灯を車の上に乗せてギアを一速に入れた。ウウン、とサイレンが唸りを上げた。

被疑者は、真夏に輪をかけて気の弱そうな、二十代そこそこのサラリーマン風の男だった。取り調べ室の椅子が大きく見えるほど小

さくなくて腰掛け、今にも泣きそうだ。これ以上委縮させないようにだろう、日野の声はいつになく優しくかったが、それでも声を掛けた途端に両目に涙が盛り上がった。

「本当にあの人がやったんでしょかね。とてもそんな風に見えませんでしたけど……、なんだか気の毒でしたよ」

「んー、まあでも痴漢なんて気の弱い奴がやるもんだろ」

相変わらず間延びした日野の声を聞きながら、真夏はもう一度取り調べを振りかえっていた。被疑者の名は須々木誠一。二十二歳、入社したての新卒サラリーマンだ。恋人もいて、仕事に慣れたら結婚すると約束している。それを涙ながらに語った後、最後に彼は一言、こう言ったのだ。

「それでも僕はやってない……か」

「そんな映画あったよなー。あれ、結局有罪だったわけ？」

あくまで雑談のノリを続ける日野に、真夏はため息をつく。

被疑者にいちいち同情しては仕事にならないのは分かっているが、須々木の家族や婚約者を思うとやはり気の毒だった。

「ま、これでこのところの連続痴漢事件も解決だ。帰りに大將ンとこで一杯やって行こうぜ」

ぽん、と肩を叩かれる。

励ましてくれているのはわかったが、とてもそんな気分にはなれなかった。



終電はガラガラだったが、真夏は座席の一番端に浅く座ると、だらしなく背もたれに体を預けた。そんな気分でなくとも先輩に誘われれば断われず、例のラーメン屋で飲んだビールが定食を押し出そうとして胃の中で戦争している。

「あれ？　もしかして佐藤じゃないか？」

だが不意に声を掛けられ、真夏は閉じていた目を洩々と開いた。

声の方を向くと、向かいの席の真ん中に座っていたスーツの男が笑いながらこちらを見ていた。

「やっぱりそうだ。まさかと思ったたら佐藤まさかじゃないか」

「……ああ、えっと……吉岡？」

幼稚園の頃から何度言われたかわからない、聞き飽きたジョークはもう挨拶と思って流している。目をこすりながら相手を確認すると、警察学校時代の同期だった。

「久しぶり。今どこだ？」

「西区。佐藤は？」

「今年異動があつて北区になったよ」

地下鉄が停車し、大きく揺れる。思わず口を押さえた真夏を見て、吉岡はからからと笑った。

「相変わらず弱そうだな」

「どうにも、ビールが旨いと思えない」

「お子様だなあ」

近くの乗り場から、派手な女が一人乗車してくる。彼女は向こうの、誰も座っていない座車両へと姿を消した。その間に、吉岡も真夏の隣に席を移動してくる。

「最近痴漢が多いんだよな。いつもこんだけガラガラなら仕事も減るのに」

それを見るときもなしに見ながら呟いた吉岡に、真夏は一瞬吐き気を忘れて顔を上げた。

「そっちもか？ 俺んともだよ。けど今日逮捕された」

「えっマジか？」

「同一犯なら、少しは忙しくなくなるだろ」

「そうか、そりゃ助かるな。今日もさて帰ろうかってときに一件入ってきて、こんな時間だ」

吉岡はほっとしたように笑ったが、その言葉を聞いて真夏は前言を翻すことになった。

「あ……、いや、悪い。なら同一犯じゃないな。逮捕があつたのは

朝だから」

「なんだ、そうか。痴漢は厄介だよな。一度逃がしたらよっぽつかまんねーし、かといって捕まえたら冤罪だと言われるし」

「うん……」

吉岡は次の駅で降りていった。

真夏は地下鉄を降りると、背広の内ポケットから携帯を出し、リダイヤルから親しかった元同僚の名前を探して発信ボタンを押す。五回ほどコール音が鳴って、相手が出た。

「あ、ごめん。今日仕事？ ……そうか。ああ、俺も今帰り。ちょっと聞きたいことがあってさ……。あのさ、今そっちでも痴漢多発してる？ ……うん。うん、そうか。ありがとう。疲れてるとこ悪いな。ああ、次の休みには飯でも行こう」

4…タバコと先輩

事件はまだ終わらなかった。

その日、二件目の逮捕が入った。また現行犯逮捕の報せを受けてかけつけると、今度は中年の男がすっかり動転した様子でパトカーに乗せられていた。

名前は戸川隆平、五十四歳、会社員。彼が現行犯逮捕されたのは女性専用車両で、とても言い逃れができない状況だった。

だが、取り調べになると戸川も犯行を否認した。

「しかし、あなたが乗っていたのは女性専用車両ですよ。そもそもどうしてそんなところに乗ったんです」

尤もな日野の問いに、戸川はズボンからハンカチを取り出すと、額に浮かんだ大粒の汗を拭った。

「普段は地下鉄を使わないんです。今日はたまたまバスに乗り遅れてしまったので地下鉄に乗りました。私が以前乗ったときは女性専用車両がなかったですし、何より慌てていて……」

そのハンカチは、そのまま目元に当てがわれることになった。

「今日は大事な商談があったんです。なのに出勤できなかっただけでなく、痴漢だなんて……。妻や娘に何と言えばいいんだ……」

恐らく妻が持たせてくれたのであろうハンカチを握りしめ、戸川が恰幅のいい体を震わせる。その姿を見て、調書を作りながら真夏は何度目かわからないため息をついた。

「先輩。戸川は白なんじゃないでしょうか。大事な商談がある日に痴漢なんて、普通しませんよね？ それに戸川が嘘をついているようには見えません」

「それを言うなら、大事な商談があるのにバスに乗りそびれるのだって不自然だろ」

「そう、かもしれませんが。遅刻は何か理由があったのかもしれないま

せん。商談の話が本当かどうかはすぐ裏が取れますし、遅刻の理由がはっきりすれば……」

尚も言い募る真夏を、日野はさも面倒くさそうに一瞥してから踵を返した。

「戸川はもう容疑者じゃない、被疑者だぞ。あと俺達がやるのは留置手続きくらいだ」

冷たく吐き捨てられて真夏は尻込みしたが、調書を作成するのに聞きたいことがあったのを思い出し、仕方なく日野を追い掛ける。

日野はそのまま署の外に出て、煙草に火をつけた。

真夏は煙草を吸わないので、ただその横で調書を手に立ちつくす。質問したかったが、日野の機嫌が悪いので声をかけづらかった。日頃ふざけているだけに、口を噤まれると異様な雰囲気になる。

「戸川が嘘をついていなかったとして。じゃあお前は被害にあった女の子達が嘘ついてるって言うのか？」

はっとして、真夏は俯いた。

泣きじゃくる女の子を、婦人警官が慰めていた光景を思い出す。彼女らもまた、嘘をついているようには見えなかった。

須々木の状況ではまだ間違いの可能性もあったが、戸川の場合、被害者の周囲に男性は戸川しかいなかったのだ。どちらかが嘘をついているとすれば戸川であるのは明白だった。

「確かに痴漢冤罪は深刻な問題だよ。だいたいちゃんと立証できないまま有罪になっちゃう。だが、グレーだからって白にしてたら今度は女性が泣き寝入り、痴漢は大喜び満員電車は無法地帯だ。だから女性専用車両を作ったりして対策しているのに、あのおっさんはわざわざその中に飛び込んでんだぜ。救いようがねえよ」

「でも、だからって……」

「ああもう、うっぜえな!!」

珍しく日野が怒声を上げて、真夏はびくりと傍目にもわかるほど肩を跳ねさせてしまった。

「お前がどうこう言わなくなったら、司法のプロが威信をかけて今も

戦ってんだよ！ お前はなんだ、マルヒもガイシャのことも全然知らねえ上に、詳しい法律なんか地方公務員法くらいだろうが！ 知らねー奴が感情論わめいて何になる。まだ調書ひとつろくに仕上げらもしねーのによ」

煙草を灰皿に押し付け、日野がギリリと真夏を睨む。別人のような目だった。

「憤ってんのが自分だけだと思うなよ。それでも俺達は仕事するかねーんだ。周囲にどんだけ罵られようと、職務を遂行するのが俺達の仕事なんだよ。分かったらいちいち被疑者に感情移入してねえで、とっとと仕事しろ！」

そう言い残して日野は署内に戻って行った。彼が灰皿に置いた吸殻はまだくすぶっていて、のろのろと手を伸ばしてそれを完全に消化する。涙が出そうなのは、煙が目染みているのだと言い聞かせた。

それから提出した調書は、全然駄目だと矢代に突き返された。

5..ラーメンと店主

真夏が署を出る頃には、時間は午後十時を回っていた。なんだかんだと雑務に追われていたのだが、今の真夏にはすることがある方が落ちついた。七時を回った頃、日野が退勤したときは、正直ほっとしたものだ。だがその所為で、仕事は難航して遅くなった。

駅に向かう途中で腹が鳴り、そういえば昼食も夕食も取っていないことを思い出す。昼は日野ともめたせいで食欲がなく、夜は雑務に追われて暇がなかった。正直今も食事をする気分ではなかったが、さすがに朝から食べてなければ感情で空腹はごまかせない。

転勤してきたばかりでこの辺りの店に明るくない真夏は、自然あのラーメン屋に足を向けていた。日野がいるかもしれないと思うとためらったが、七時に一人で署を出た日野がまだ店にいるとは考えにくい。それでも、真夏はそっと店内を窺って、日野の姿がないのを確認してから立てつけの悪い扉を押した。

「あつ、佐藤さん！　いらっしやい！」

こちらに気付いた莉子が、水の乗った盆を片手に、にこりと笑う。「あれっ、まさか一人？」

からかうような口調を見ると、そんな言い方をしたのはわざとだろう。聞き飽きている揶揄も、可愛い女の子に言われると何故か違って聞こえる。落ち込んでいた気分がほんのすこしだけ和らいで、真夏はやあ、と片手を上げた。

「どっちにすんだ、兄ちゃん。まさかラーメンか？」

「そんな無理に使わなくていいですよ。……ラーメンにします」茶化してくる店主に苦笑しながら答え、それからちよつと考えて、真夏はビールも注文した。すぐに莉子が中瓶とグラスを持ってきて、栓を開ける。

「良かったら注ぎましょうか？」

「えっ……いいですよ。自分でやります」

「まあ、いいからいいから」

そう言って莉子が瓶を持つので、真夏はあたふたしながらグラスを持った。若い女の子と話す機会などないので、どういう対応をしているのかわからない。だがそれより今は、店主の睨みの方が怖かった。

「佐藤さん、なんだか元気ないですね？」

「えっ……、そ、そう？」

「それに、こないだはビール苦手そうに見えましたけど。何かあったんですか？」

「いや……」

注がれたビールをぐいっとあおる。独特の苦みが口の中に広がった。やはり旨いとは思えないが、莉子がまた瓶を傾ける素振りをするので、真夏は空のグラスを差し出した。

「僕、やっぱり刑事向いてないんだろうなあ。日野先輩はいつもおちゃらけてるけど、ちゃんと仕事できるし。僕だけいつもうじうじしてて、情けないです」

またビールを一口含む。日野に怒られたことよりも、自分の情けなさが不甲斐なかった。

「もう、刑事の僕にできることはないんだ。何もできないのに、いや、何もする気もないくせに、言っても仕方ないことばかり言うて……」

日野に怒鳴られたときは驚いて何も言えなかったが、反発心はあった。だが冷静になると日野の言葉は全て正論だと思えた。ぽつりぽつりと真夏の口から零れる言葉を聞いて、店主がにやりと口の端を持ちあげる。

「青いねえ」

「お父さん、真剣に悩んでるのにそういうこと言わないの」

真夏がまたビールを干し、莉子は少し考える素振りを見せたが、それ以上は注がずに瓶を置いた。

「私難しいことはわからないですけど。刑事の佐藤さんでも無罪を

証明する方法はあると思うなあ」

「……でも、それは検察の仕事で……」

ぶつぶつと呟く真夏の声を、莉子のはっきりとした声を上書きする。

「真犯人を挙げればいいじゃない」

ぽかんと、真夏は莉子を見上げた。

彼女はそれだけ言うと、くるとこちらに背を向け、厨房の方へ戻っていく。ぼうつと揺れるポニーテールを見ていると、ごんという音がした。カウンターにラーメンが置かれていた。

いただきます、と呟いて、箸を割る。テレビの声と、莉子が食器を洗う音を聞きながら、真夏はラーメンをすすった。

真犯人を上げるといっても、須々木のと時も戸川のと時も、捕まったのは電車の中だ。どちらも被害にあった女の子が悲鳴を上げた。須々木は近くにいた乗客に手を掴まれ、戸川にいたっては周囲の乗客は女性だけだったのだ。

電車の中では防犯カメラもないし、満員電車のごたごたの中では目撃者を探すのも難しい。思いつく限りのことをやり終えてしまった今、時間が経過すればするほど証拠が出てくる確率は低くなっていく。

絶望的な気分になっていると、急にがたりと扉が鳴って、思考はそこで中断された。

「莉子！ 私の時計勝手に持って行ったでしょ！」

「げっ、やばっ」

飛び込んできたのは、二十歳くらいの女性だった。長い茶髪をきっちり巻いた、なかなかの美女だ。彼女はすかずかところらに歩いてくると、エプロンで手を拭いていた莉子の腕をぐいと引っ張った。

「やっぱり。これ彼氏に貰ったんだって言ったでしょ！？ 明日デートなの……」

「ごめーん、お姉ちゃん」

どうやら彼女は莉子の姉のようだった。化粧と服のせいで莉子よりはだいぶ華やかな印象だったが、言われてみるとどこか似た面差しをしている。

「お父さん、私やっぱり一人部屋がいい！ 莉子、私のものなんでも勝手に使っただもん」

「やだー、そんなこと言わないでよー！ 謝ってるじゃないー！」

「ちょっと、抱きつかないでよ！ きゃっ、どこ触ってんのよこの痴女！」

はっとして、真夏は顔を上げた。

姉妹の喧嘩はかしましく続き、店主がうるさいと一喝したが、いずれの声ももう真夏の耳には届いていなかった。

今まで考えもしなかった可能性が浮かんだからだ。

それからはラーメンの味もビールの味もわからず、家に帰ってからも気が急いで、真夏はその夜一睡もできなかった。

6..ビデオと女生徒

翌日、真夏は矢代が出勤すると、もう一度前の事件の防犯カメラが確認したいと願い出た。矢代は、片肘について書類を読みながら、顔も上げずに答えてくる。

「ああ、そうだな。そこに須々木か戸川が映っていれば動かぬ証拠になるだろう」

「それから、この辺で起こった他の防犯カメラも一緒に確認したいんですが」

「なんで？」

やはり書類に目を落としたまま、矢代が端的に問いかけてくる。真夏は一瞬迷ったが、逡巡の後、覚悟を決めたように声を上げた。

「僕は、その二人が犯人だと思っています」

「お前、まだそんなことを……」

背後から日野の声がかかったが、真夏は怯みそうになるのを堪えて、言葉を続けた。

「先日西区にいる同期から、そちらでも痴漢が多発していると聞きました。でも前の署の同僚は、そんなことはないと言うんです。それで私は他の署もあたってみたのですが、痴漢が多発しているのは同じ地下鉄の沿線で、地域もごく限定されていることがわかりました。普通は同一犯と考えるのが自然ですよね？」

「なら、須々木は誤認逮捕で、犯人は戸川だけってことか？」

日野が隣まで歩いてきて、そう言う。だが真夏は彼の方を向いて、首を横に振った。

「須々木が誤認逮捕である可能性は大きいと思いますが、僕は戸川でもないと思います。戸川はバス通勤ですし、そもそも須々木が逮捕された時間、戸川は入社していたんじゃないでしょうか。裏を取らないと確かなことは言えません」

昨夜、眠れない間に整理した考えを、真夏はゆっくりと声にして

いった。自分が感じた違和感や、引かなかった点を、ひとつひとつ丁寧に拾い上げて、心の中で繰り返し返したことを。

「なら誰が犯人だって言うんだ。戸川の他に男性客はいなかったんだぜ？」

「……思ってたんですが」

予想通り日野は噛みついてきたが、真夏は慌てなかった。

昨夜、莉子の姉妹喧嘩を見て――正確には、莉子の姉が叫んだ言葉で気付いた可能性。これを聞けばきっと、日野も納得する筈だ。

「犯人が、『男』だとは限らないんじゃないですか？」

「……！」

そこで始めて、矢代は書類から顔を上げた。日野は尚も言い募ろうとしていたが、はっと何かに思い当たったように口を噤む。

「貶め屋ってやつか……」

「ええ。女性が誰かに指示されてやっている可能性はあると思います。この手段なら極めて少ないリスクで、かつ確実に、恨みを持つ人物に社会的ダメージを与えることができる」

矢代は既に書類に目を戻していたが、読んではいないのだろう。目を伏せたまま、ふうむと唸る。

「好きにやってみろ」

「ありがとうございます！」

嬉しそうに返事をして、すぐに真夏が飛び出していく。複雑そうにそれを見送る日野に、矢代は持っていた書類を突きつけた。

「じゃまあ、佐藤にやらせようと思ってたけど、日野やつについて」

「あ、はあ……」

デスクに戻っていく日野を一瞥した後、矢代はふうと息をついて椅子にもたれかかり、コーヒーに口をつけた。

「うん、旨い」



それから真夏は、署に防犯カメラの映像を持ちかえると、部屋に籠ってそれらを片っ端からチェックした。ラッシュでこった返す人々を、丁寧に一人一人チェックして、逮捕された瞬間や、事件直後のホームを見比べていく。すると、真夏の思ったとおり、ほぼ全ての映像に映り込んでいる人物がいた。

「係長、いました。ほぼ全ての現場に居合わせた人物が」

真夏が確認を終えて戻ってきたのは、もう夕方になろうかという頃だった。デスクで書類を書いていた日野が真夏を見上げ、「すげえ限」と呟く。

「やはり女性でした。彼女がこの一連の痴漢事件に関係している可能性は高いと思います」

「うん。で、そいつは特定できそうかい？」

コーヒーを飲みながら、矢代が尋ねてくる。

「あ、はい。特徴的な制服を着ていたので、どこの学校か調べて当たってみます」

矢代はそれには答えず、飲み終えたカップを机に置いて「不味い」と呟いた。真夏はずっと映像のチェックでこもっていたので、恐らくは日野が入れたのだろう。

「なあ、真夏。特徴的な制服ってもしかして、襟にチェックの縁取りがある白のブラウスで、クロスが入ったタイをつけてる、フリルスカートの制服じゃねえ？」

苦笑していると唐突に本人から声をかけられ、真夏は焦った。正確には、唐突だったから焦ったのではない。頭の中を覗いたように、さっき見た制服の特徴をいやに細かく述べられたことに驚いた。

「あ、は、はい。先輩、見てたんですか？」

「見てねえよ。でもあの沿線で特徴的な制服つつたらそこしかねえもん。そこなら聖アリシア女学院だ。ちなみに住所は北区××町二丁目十一」

自信たっぷりな答える日野に、真夏はある意味感心したが、矢代は呆れたようにため息をついた。

「実は日野が犯人なんじゃないのか」

「やだなー、係長。冗談キツイっす」

下らない冗談のやりとりで、だが真夏は、日野がいつもの調子に戻っていることにほっとした。最初は変な人だと思っていたが、彼はそうでないと調子が狂う。日野を嫌っている者も多いと思うが、矢代はなんだかんだで、一目置いてるように思えた。

「それなら、これから聖アリシアを当たってみます。教師に映像を見てもらえば、誰かはつきりすると思いますから」

疲れていたが、真夏はデスクから背広を取って羽織った。

自分はまだ新米で、できることは少ないが、いつかは自分も誰かに一目置かれる存在になりたい。そのために、目の前にある、自分でもできることひとつひとつを丁寧になして行こう。そんなことを思いながら署を飛び出す。

だが、そうして車に乗り込んだ真夏を窺う視線があることに、真夏は全く気付いていなかった。

7..セーラー服と真犯人

日野の言葉通り、カメラに映っていた女生徒の制服は、聖アリシア女学園のものであった。

丁度下校時刻に被ってしまった、校門は同じ制服を着た女性徒で溢れかえっている。

そんな光景に真夏はいささか気遅れしてしまった。こんなことから、矢代にお願いして日野と一緒に来てもらうんだったとさえ思う。仕事で来ているのに、警察ですと言う前に、校門にいる警備員に取り押さえられてしまいそうな気がしていた。

だが、そんなことで尻込みしている場合ではない。よし、と覚悟を決めて、警備員へと歩み寄る。

「あ、すみません。こういう者なんですが――」

だがそこで、真夏は警察手帳を取り出し掛けた手を止めた。

その視線は警備員を越えて、今こちらに向かってくる女生徒に釘付けになる。ツインテールの両方にシュシュをつけた髪型は防犯カメラの人物と同じで、顔もよく似ているように感じた。

「ちょ、ちよっと待って下さい。急用ができました」

慌てて手帳を仕舞い、その場を離れる。不審人物みたいになってしまったが、今は問題の女生徒を見失わない方が真夏にとっては先決だった。

充分に距離を取ってから、もう一度さっきの人物を確認する。他の生徒達が、二、三人、もしくはそれ以上のグループで連れだって帰るのに対し、彼女はたった一人で校門を出ると、高級住宅街に続く大通りとは違う道へと歩き出した。

他の女生徒達の流れを見て大通りの方にいた真夏は、それに気付いて、慌てて携帯をかけようとしていた手を止めた。距離は保ったまま、彼女を追ってそちらの方向へ向かう。どんどん人気のない方へと向かった彼女は、やがてお世辞にも柄のよくない男たちと合流

した。

その時点で、もう一度携帯を取り出して、ボタンを押す。

「佐藤です。偶然例の女生徒を発見したので声をかけようとしたのですが、柄の悪い男たちと親しく話をしているので、そのまま様子を見ています。はい。――はい。了解しました」

電話を切って尾行を続ける。やがて、人気のない工場のようなところに辿りつくつと、男達の一人が女生徒に封筒を差し出した。その中身を覗いて、女生徒がきゃあ、と歓声を上げる。

「やった、これで新作のバッグ買える！」

満面の笑みで封筒を鞆に仕舞うと、彼女は封筒の代わりに煙草を取り出して啜えた。それに男が火をつけてやる。

「ねー、今度は新作の靴が欲しいんだけど、もうないの？」

「馬鹿言え、今までの報酬で十分だろうが。これ以上同じ手口を重ねたらサツも勘づくかもしれねえ。そろそろ店じまいだ」

「ええ〜」

不満そうな声を上げながら、ふうつとため息のように女が煙を吐き出す。彼女は地面にしゃがみ込むと、しばらくしかめっ面で煙草をふかしていたが、やがて煙草を投げ捨てると立ち上がった。

「まあ、いいわ。服もアクセもいっぱい買えたし。でもまた儲け話があったら教えてねえ」

ばいばい、と手を振って踵を返し、女生徒がこちらに向かって歩いてくる。まずい、と真夏は焦った。男の数は三人。抵抗されたら一人で取り押さえるのは無理だ。ここは一度退くべきと慌てて引き返そうとした真夏の耳に、女生徒の悲鳴が聞こえた。

「離してよ！」

「静かにしろよ。一応弱味を握っとかないと、お前が警察に喋らないとは限らないからな」

何事かともう一度様子を窺うと、下卑た笑顔を浮かべながら、男が女生徒を拘束している。それを見て、真夏は咄嗟に飛び出していた。

「や、やめろ！」

正しい判断かは解らなかったが、今自分を止めなければ女生徒が酷い目に遭わされることは確かだ。自業自得と言えそうだが、かといってそれを見過ごす気にはなれなかった。

飛び出してきた真夏を見て、男達が身構える。警察学校で逮捕術くらは学んでいるが、男三人をねじ伏せられるほど真夏は腕に覚えがない。

「警察だ！ 間もなく、大勢仲間が到着する。抵抗しても罪が重くなるだけだぞ！」

はったりで凌ぐしかなかった。警察手帳を見せると男達は一瞬怯んだが、それでほっとするのは早かった。

「畜生！」

女生徒を拘束していた男が、自棄になってこちらに殴りかかってくる。咄嗟に真夏が取れた行動は、顔と頭を両手で庇うことだけだった。

だが、覚悟した衝撃はいつまでたっても訪れない。怪訝に思いながらガードを解いて目を空けると、二人の男が呆然と自分の向こうを見ていた。振り向くと、殴りかかってきた男が倒れて伸びている。

「……え？」

状況がつかめずばかんとしていると、視界の端で何かが動いた。それを追う。目に入っただのは、肩で揺れる茶色の尻尾。

「お前、今なにをした……ッ！」

驚きの隠せない声と共に、拳を振りかぶった男が宙を舞う。見る間に二人の男が地面に転がったのを見て、最後の一人が懐からナイフを取り出した。

「このアマ……！」

彼の言葉通り、次々と男をねじ伏せているのは女だった。

赤いラインが入った、スタンダードな紺色のセーラー服に、見覚えのあるポニーテール。

「君は、まさか……！」

言葉半ばで、男がナイフを振りおろす。あぶない、と真夏が飛び出す前に、女は男の手をとって腕を抱えていた。男が苦悶の表情を浮かべてナイフを取り落とす。そのまま彼女は男を地面にねじ伏せると、腕をねじり上げたまま動けないようにその背に乗る。

「ちよーつと詰めが甘かったですねえ」

そう言っただけ振り向いたのは、ラーメン屋の娘、莉子だった。

「ど、どうして君がここに……！」

「さっき署の前にいたんですよ。熱い視線を送ったのに、佐藤さん全然気付いてくれないんだもん」

「でも、僕は車で移動したんだよ！」

セーラー服を着ているところを見ても、莉子はまだ学生だろう。車を運転できるとは思えない。納得行かない様子で叫ぶ真夏に、莉子はんー、と気まずそうな声を上げた。

「チャリ専用の秘密の抜け道ですよ。それより、ほらほら、手錠手錠！」

「あ、ああ、ごめん」

まったく理解できず混乱しながらも、莉子に急かされて男に手錠をかけた丁度そのとき、サイレンの音が聞こえてきた。

「お仲間のご到着だね。それじゃ、私はこれで！」

啞然とする真夏を置き去りに、莉子は自転車に飛び乗ると、パトカーの音とは逆の方に走り去って行った。

8..迷刑事と名探偵(第一章完)

立てつけの悪い扉を押そうとすると、いやに簡単に扉が開いた。修理したのかと思ったが、それは違うということはずぐに分かる。莉子が内側から扉を引いたのだった。

「そろそろ来るかなーって思ってた」

「参ったな。莉子さんはなんでもお見通しなんだね」

「任せて下さい！ ……なんて、本当は窓から見えただけですけどね」

小さく舌を出して、莉子は厨房へと戻っていった。席に着くと、直に莉子が水を運んでくる。

「今日はどっち？」

「どっちだと思う？」

「んー。じゃあ、定食一丁ー！」

洞察力を試すつもりだったのだが、莉子は勝手に注文を決めてしまった。だが優柔不断な真夏にしてみれば、決めてもらえた方がありがたかった。特に好き嫌いはないのでどちらでも構わない。というより、この店の定食もラーメンも真夏は好きだった。素朴で懐かしい味だ。

「……君は、全部知ってたんだね。知ってて、お姉さんと喧嘩する振りして僕にヒントをくれたんだろう？」

莉子が厨房に戻る前に、真夏はそんな風に切り込んでみた。振り向いた莉子が大きく目を見開いて、それからわざとらしくおどけて見せる。

「わあ、名推理ー。佐藤さん名探偵みたいですな」

「どっちがだよ。君は不思議な人だね。結局、どうして君が僕の先回りできたのかは考えてもわからなかった」

「それはですねえ」

気まずそうに莉子が頬を掻く。

「実は友達が被害者の一人で、個人的にこの一連の痴漢事件を調べていたんですよ。で、痴漢が発生した時間と場所から、もともと聖アリシアに当たりをつけていました」

こともなげに言われて、真夏は絶句した。この少女は、とっくの昔に警察の遙か前を進んでいたのである。

だが、それは仕方ないことだとも言える。現行犯逮捕は一般人でもできる。一般人によって現行犯逮捕されてしまえば、警察としては署に連行して留置するしかない。

そういう、職務の枠を外れた自由な視点で見れば、そう難しくはない謎なのだろう。だが、真夏にはまだ腑に落ちない点がいくつかあった。

「でも、どうしてあの日僕が店に来るってわかったんだい？ お姉さんの時計を持ってきたのだって、わざとなんでしょう？ それって僕が来ることがわかってたってことだよね？」

「さあ、なんのことでしょう」

目を逸らしてとぼけた声を上げ、莉子が厨房へと駆けて行く。

今回の事件が解けたのは、難しくない謎、だったからではなく。

それ以上に、少女の頭が物凄く切れるからではないかと。

その推測が確信に変わるのは、また別の事件の話。

1..不可解な独り言

数度目の赤信号に捕まって、男は舌打ちすると二本目の煙草に火をつけた。

「悪いね兄貴。休みの日に」

「まったくだ。忙しい社会人を足に使って自分は旅行。大学生はいい身分だな」

窓を数センチだけ開けて、ふうつと煙を吐き出しながら、隣の弟を睨む。だが兄はすぐにふつとその相好を崩した。

「ま、遊べるのも今のうちだけだからな。それより電車の時間大丈夫なのか」

「ああ、いくら混んでるってもせいぜいあと十分くらいだろ。どうせ一人旅だし遅れたところで差し支えないよ。荷物もって歩かなくて済む方が助かる。雨も降ってるし」

そうか、と答えたところで信号が青に変わる。ゆるゆると車が動き出して、男もアクセルに足を乗せた。

「一本貰っていい？」

「ああ」

運転席の男が片手で煙草を軽く振り、飛び出た一本を助手席の男が礼を言って取る。

「にしても、なんでんな可愛い煙草吸ってんだよ。もうオヤジなんだからマイセンとかにしとけば」

「彼女がこれにしろって言うんだよ。縁起が良さそうだからって。」

大体なあ、オヤジって、俺はまだ二十代——」

「はいはい」

適当に相槌を打ちながら、貰った煙草にシガレットライターで火を点ける。

休日と雨天が相まって道はかなり混んでいたが、それでもゆるやかに流れている。

「吸い終わる頃にはつくかな」
煙と一緒に、男は助手席から独り言を流した。



『本部から北3』

『北3です、どうぞ』

『××町三番地で人が倒れているとの110番入電中。緊急走行で現場^{げんじょう}出向せよ、どうぞ』

朝礼が終わり、署内のざわつきに混じって流れてくる無線の声に、真夏はコーヒーを淹れる手を止めた。だが当直の刑事が立ち上がるのを見て、慌ててコーヒーを矢代のデスクに置く。

「あ、僕たちも行きます」

「ええ、俺も？」

僕たち、と言ったところで、日野があからさまに面倒そうな顔をする。

「何言ってますか、先輩。早く行きますよ」

「待てよ、仕事は他にも沢山あんだよ。ねえ、係長」

呼ばれて、コーヒーを啜っていた矢代がのろりと日野に顔を向ける。そしてにべもなく一言告げた。

「早く行け」

「……」

日野がなんとも言えない顔をしながらも黙って立ち上がり、真夏は小さくため息をつく、上着を羽織った。

現場に着くと、地域課の警官が黄色いテープを張っていた。それに締めだされる野次馬の中に、真夏が見知った姿を見つけて顔を上げる。

「あ、あれリコチャンじゃね」

日野も同じ人物を見つけたようで、そんな声を上げる。

彼女は野次馬達の一番前にいて、救急車に乗せられていく人物を食い入るように見ていた。近づいてもこちらに気付く様子はない。

「タバコ……」

「え？」

真夏が声をかけようとすると、その前に独白のような彼女の声が野次馬の喧騒を縫って聞こえてくる。なんのことかと莉子の視線を追うが、現場に煙草が落ちているわけでも、立ち並ぶ店の中に煙草屋があるわけでも、通りに灰皿があるわけでもない。

思わず真夏が聞き返すと、莉子はそこで初めてこちらに気がついた。

「あ、佐藤さんに日野さん。おはようございます」

軽く莉子が会釈をして、その頭でぴよこんと尻尾が跳ねる。真夏は、さっき何と呟いたのかを聞こうとして口を開いたが、その前に日野が彼女に声を掛けていた。

「リコちゃん、学校の時間じゃないの。補導しちゃうよ？」

「あ、いけなーい」

日野の口調はふざけていたが、言われてみればもうそろそろ授業が始まっている時間だ。莉子もセーラー服を着ていて、携帯で時間を確認するなり慌てた顔をした。

「日野さんに補導されるとやらしいことされそうだから、学校行きます」

そんなことを言いながら、莉子は少し離れたところに置いてあった自転車まで駆けていき、そのまま走り去って行った。

「ひっでえ……」

「日頃の行いですよ」

心ない台詞を浴びせられて嘆く日野に、真夏がここぞとばかりに止めの一言を叩きこむ。日野のことを先輩として尊敬はしているが、悪ふざけがすぎるのが玉に瑕なのだ。

打ちひしがれる日野を置き去りに、真夏はテープを貼っていた警

官に声を掛けた。

「お疲れ様です。どういう状況か教えて頂けますか？」

「ん、ああお疲れさん。その喫茶店から出てきて倒れたみたいだね。息はあって今救急車で搬送されてったよ」

丁度テープを貼り終え、野次馬達を散らしながら警官が答えてくる。真夏は軽く頭を下げた礼を述べ、日野に伝えようと振り返った。だが、さっき立ちつくしていた場所にもう彼はおらず、日野を探して視線を走らせると、野次馬の一部と話をしている。どうやら聞きこみをしているようだ。それを確認して真夏は表情を引き締めると、カメラを取り出して現場の撮影を開始した。

2..正反対の兄弟

それから数日が過ぎた。

真夏はいつものように出勤して、いつものようにコーヒを淹れ、それから自分の席に戻って書類に向かう。刑事といっても基本はデスクワークだ。ドラマのように、尾行したり張り込みしたり、ましてや銃撃戦をしたりカーチェイスしたりと、そんな華々しいものではない。実際には会社員と同じように、お茶汲みして書類を書いたりする。

そんなわけで、昨日あった万引きの報告書を書いていると電話が鳴って、真夏は文字を書いていた手を電話に伸ばした。

「はい、北警察署刑事課佐藤です。あ、はい。はい。わかりました、お疲れ様です」

電話を置くと真夏は立ち上がり、急ぎ足で矢代のデスクに向かった。

「係長、こないだ××町で人が倒れていて通報が入った件ですが、彼の持ち物から毒が検出されたそうです」

電話の内容を伝えると、矢代は見ているのかいないのかわからない書類から顔を上げた。

「それで、病院の許可を得て被害者の体も調べたそうなんです、右手の人差指と中指から濃い毒物反応が出たと、科捜研が」

「――タバコだな」

ぼそっと声を上げたのは日野だった。矢代がそちらを向いたので、真夏も彼を振り返る。その言葉に、真夏は既視感を覚えていた。それが何かを思い出そうとすれば、若い女性の声が今の日野の声にピッタリと重なった。

「あ……」

思わず声を漏らしてしまう。だが、矢代と日野の視線を感じて、真夏は慌てて軽く首を振った。

「いえ、なんでもありません。とりあえず、殺人未遂の可能性も出てきましたし、もう一度被害者の周囲を洗い直してみます」

「そうだな。日野」

「え、俺は書類が……」

呼ばれて、日野が渋い声を上げる。相変わらずの日野の様子に真夏は苦笑したが、矢代は慣れた様子で淡々と聞き返した。

「急ぎか？」

「いえ、全然」

「行け」

短い会話の応酬の後に黙って日野が立ち上がる。

矢代から日野の扱いもひとつ学んだ真夏だった。

被害者の名前は池本秀一。二十九歳で大手の銀行に勤めている。

真面目で誠実な人柄だが、かといって融通が利かない型物ではなく砕けた一面もあり、上司、同僚、後輩、誰からも評判は上々である。

実家は地方で、こちらの大学に通う弟、池本健太と二人暮らし。

兄の秀一が倒れたときは旅行中だったが、報せを聞いて急きよ帰宅していた。

「とりあえず、もう一度弟さんに話を聞いてみましょうか」

日野は答えなかったが、とくに反対もされなかったので真夏は池本兄弟の住むマンションの方へハンドルを切った。

「すみません、先輩。〇〇町ってここを右折で良かったですよ？」

前に話を聞いたときは向こうから署に来てもらっていたので、アパートに行くのは初めてである。大体の方向は分かって、さすがに細かいところは記憶が曖昧だ。車によってはカーナビがついているものもあるが、生憎今乗っている車にはそんな便利なものはなかった。

「ちっ、めんどくせーな。全部にカーナビつきにしろっての」

ぶつぶつ言いながら、日野が地図を開く。日野もよく知らないようだ。真夏が車を止めて地図を覗きこもうとすると、日野が手を振

ってそれを止めた。

「この俺が特別にカーナビになってやるよ。さっさと行こうぜ。そこ左だ」

ありがたくその言葉に甘えた真夏だったが、途中でそれが間違いだったと痛感した。日野は案内が下手で、交差点に差し掛かってから今のところは右だの、曲がるところを随分過ぎてから行き過ぎただの、結局同じところをぐるぐるして随分時間をロスしてしまった。先輩に案内を任せてしまうと、違うような気がしても中々言い出せないのが困りものである。

署を出て三十分、ようやく池本兄弟の住むマンションに辿りつき、真夏は大きなため息をついた。

「結構いいトコ住んでんだなあ」

「××銀行っていったらかなり大手ですからね」

他愛ない会話をしながら、真夏はエントランスのインターホンで池本の部屋番号を押した。

『はい』

「あ、北署の者です。池本健太さん？」

『はい、そうですか』

「お兄さんの件で話が聞きたいのですが、今大丈夫ですか？」

『はい』

淡々とした返事の後に、エントランスの自動ドアが音を立てて開いた。池本の部屋は十階で、エレベーターを使って昇り、玄関のインターホンを押すとすぐにドアが開いた。

「毒だって？」

「ええ。お兄さんに恨みを持っている人に心当たりはないですか？」
警察手帳を出して名乗り、簡単な挨拶をしてから本題に入ると、健太は驚いたようなりアクションを見せた後、手を顎に当てて俯いた。

「……いえ。兄の交友関係はよく知らないんです」

「では、最近お兄さん変わった様子とかはありませんでした？」

「俺は学生だから、兄が帰って来る時間までかけてることが多くて、一緒には住んでるけどあまり会っていません。倒れた日も俺は旅行中でしたし、よくわかりません」

「そうですか……」

それから二、三質問をしたが、結局これはという話は聞けず、真夏と日野はマンションを出た。

「真面目兄に不良弟ねえ。案外弟が仕込んだのかもな」

助手席に乗り込みながら、日野がそんなことを言う。

確かに弟の健太は、髪は脱色していてピアスをしており、不良とまでは言わなくても所謂チャラ男という見てくれだった。話を聞かずに限り夜遊びもしているようだから、昼は学校に行っても寝ているのではないかとゆうに想像がつく。

「僕は一人っ子だからよくわかりませんが、そんなものなんですかね？」

「逆に俺は不良兄だから真面目弟がめんどくせえな」

昔は兄弟が欲しいとよく思ったものだが、日野が顔をしかめるのを見て、一人っ子で良かったのかもしれないと真夏は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1198y/>

まさかの事件簿

2011年11月23日11時48分発行